

「その傷、俺が縫って
やる」深夜の革工房で
革紐に縛られたカント
ボーイが職人の一点モ
ノに仕上げられる話

「っ……痛……」

「黙れ。動くな」

鉤谷の声は低くて短い。無造作に袖をめぐり上げ、前腕の擦り傷を露出させた。消毒液かと思った。ガーゼかと思った。
——舐められた。

「ッ♡」

ざらついた舌が傷口に這う。無精髭がちくちくと皮膚を刺し、鉤谷の吐息が前腕の内側を湿らせた。

「な、何して……っ♡」

「消毒だ。唾の方が沁みねえだろ」

嘘だ。絶対に嘘だ。

でも手首を掴む力が強くて振り払えない。タコだらけの掌が、傷口の周りまで舐め広げていく。手首の内側、静脈の青い筋の上を、唇で辿るように。

「やっ……♡　そこ、傷じゃない……っ♡」

「知ってる」

——知ってるのに、やめない。

革の匂いが鼻腔にこびりついた。なめし油と煙草と、鉤谷の体温が混じった重い匂い。その中にほんの微かに自分の汗の匂いも紛れているのが分かって、ぞくり♡と背筋が粟立つ。

下腹部が、じわ♡と熱い。

(……っ、まずい)

カントが反応し始めている。こんなことで。たかが傷を舐められただけで。

ジーンズの内側、下着の内側。誰にも知られてはいけない場所が、じっとりと湿り始めていた。

「傷は前腕だけか」

「はい……それだけです」

「嘘つけ。転倒で肘だけ擦るわけねえだろ。腰も見せろ」

「いや、腰は——」

「いいから」

有無を言わせない手つきで革ジャンのジッパーが下ろされた。Tシャツの裾をたくし上げられ、脇腹に冷たい空気が触れる。

「っひ♡」

「ほら見ろ。こっちも擦れてんじゃねえか」

鉤谷の指先が腰骨の上を滑った。確かに薄い擦り傷がある。けれど指が辿る範囲は傷よりずっと広くて、腰の窪みまで撫で下ろされた。

身体が勝手にびくっ♡と跳ねる。

「敏感だな」

「ち、違……っ♡　くすぐったいだけ……っ♡」

「へえ」

全然信じてない声だった。

鉤谷が作業台の引き出しから革紐を数本取り出す。使い込まれて飴色に変わった、太い牛革の紐。

「なに……それ……」

「暴れると縫い目が歪む。革も傷も同じだ——固定が先」

「え、は……っ？♡♡」

手首を掴まれ、仕立て台の脚に革紐で巻きつけられた。ぐるぐる、ぐるぐる、巻き締められるたびに革が皮膚に食い込む。振りほどこうとしてもびくともしない。

使い古した革紐は柔らかいのに頑丈で、もがくほど結び目が締まる構造になっていた。

「やっ……待って、これ……っ♡♡」

「うるせえ。革ジャンの傷は肘。身体の傷は腰と前腕。全部確認してから縫う。文句あるなら仕立て代倍にするぞ」

仕立て台にうつ伏せに押し付けられた。使い込まれた牛革張りの天板が素肌の腹に当たる。冷たい。なのに身体は内側からかっ♡と燃えていた。

鉤谷がベルトに手をかけた。

「腰の傷を見る。脱がすぞ」

「自分で——」

「手え縛ったんだから無理だろ」

反論の余地なくベルトを外され、ジーンズのボタンが弾ける。ずるりと腿まで下ろされた。

(だめ……っ♡♡ 見られる……っ♡♡)

ボクサーブリーフ越しの股間。そこに、男性器の膨らみがない。

鉤谷の指が止まった。

長い、沈黙。

工房のストーブがぱちりと爆ぜた。

「……お前」

「っ……」

「……カントボーイか」

鉤谷の声には驚きがなかった。ただ確認するように、低く。

下着の上からそっと手が当てられる。硬い指先が布越しに割れ目をなぞった。

「ッ♡♡」

「嘘つくなよ。もうここ、濡れてんだろ」

分かってしまう。布の外側からでも、じっとりと湿った生地が指に吸いつくのを。

下着を引き下ろされた。冷たい空気がカントに触れる。仕立て台にうつ伏せのまま、脚を開かされた。

「やだ……っ♡♡ 見ないで……っ♡♡」

「……ほう」

鉤谷が一步引いた気配がした。革を検品するときと同じ——職人の目で、カントを見ている。

「いい肌だ。コードバンより上等だ」

「な、なに言って——あ♡♡」

タコだらけの指先がカントの外側をなぞった。

硬い。ゴツゴツしている。普通の指の滑らかさなんかどこにもない。革を縫い続けた手が、柔らかい粘膜の上をずるり♡と滑る。

びくっ♡♡と腰が跳ねた。

「っ……♡♡ やめ……っ♡♡ そんなとこ……っ♡♡」

鉤谷が構わず割れ目に指を差し入れ、ゆっくりと開く。薄桃色の粘膜が工房の薄い照明に晒された。

とろり♡

愛液が糸を引いた。

「革と同じだ。仕立て前に状態を確認する。——触るぞ」

「っ、や……♡♡ やだっ♡♡ 聞いてな——あ♡♡」

指先がクリトリスに触れた。

タコの、ザリッ♡♡とした粗い感触が、過敏な突起を直接擦る。滑らかな指先では絶対に生まれない刺激が神経を直撃した。

「ひっ♡♡ う、あっ♡♡ そこ……そこやめてっ♡♡♡」

(なんで……こんなの……っ♡♡ 男の指で……カントが……っ♡♡♡)

自分の身体が裏切っている。男として生きてきた。男でいたかった。バイクに乗るのも、革ジャンを着るのも、全部——全部、この身体を忘れたかったからだ。

なのに。

タコだらけの指が円を描くようにクリトリスを揉む。押し潰すように、引っ搔くように。鉤谷の手仕事の精密さが、容赦なく感度の限界を探り当てていく。

「っはぁ♡♡ はっ♡♡ はひゅっ♡♡ だめ……だめ……っ♡♡
そうやって弄らないでっ♡♡♡」

「弄んでねえよ。検品だ」

「けんぴん……って……っお♡♡」

指が膣口に沿って滑り落ちた。入り口を浅く、くちゅ♡くちゅ♡と出入りする。爪の短い指先が入り口の肉をぐにっ♡と押し広げるたび、奥から愛液がとろとろ溢れてくる。

ぽたっ♡

それが仕立て台の革に滴った。

「……革に染みつくだろうが。こんなに垂らしやがって」

「ごめ……ごめんなさ……っ♡♡ 止められないっ♡♡♡」

（やだ……っ♡♡ 出てるの、止まんない……っ♡♡ おまんこから……こんなに……っ♡♡♡）

鉤谷が脚の間にしゃがんだ。吐息がカントにかかる。

「あ♡♡ な……っ♡♡」

舌が、割れ目を下から上まで一気に舐め上げた。

「——ンッ♡♡♡♡」

声にならなかった。

ざらつく舌の表面と、頬に当たる無精髭のちくちくした刺激。鉤谷の鼻が恥丘に押しつけられ、息を吸う音がした。

（嗅いでる……っ♡♡ カントの匂い、嗅がれてる……っ♡♡♡）

「ひ、う……♡♡ 嗅がないで……っ♡♡ 恥ずかしい……っ♡♡♡」

「革の品質は匂いで分かる。——いい匂いだ」

低い声で囁かれた瞬間、カントがきゅん♡♡と収縮した。

鉤谷が再び舌を押し当てる。今度はゆっくりと。膣口を舌先で穿りながら、溢れ出る愛液を啜る。

くちゅ♡くちゅ♡くちゅ♡

粘膜を吸う音が工房に響いた。

「はっ♡♡ はひゅっ♡♡ あっ♡♡ やだっ♡♡ おまんこ……舐めないでっ♡♡ そんなとこ……汚い……っ♡♡♡」

「汚くねぇよ。上等の一枚革だ。手入れは職人の仕事だろ」

クリトリスを口に含まれた。唇で皮を剥かれ、露出した突起を舌先でちろちろ♡と弄ばれる。吸い上げ、離して、また吸い上げる。

「ひうっ♡♡♡ おお……っ♡♡♡ やら……いやだっ♡♡♡ ぐんぐん……っ♡♡♡」

（男なのに……っ♡♡ おまんこ舐められて……こんな声出してっ♡♡ 気持ちいいって……思っちゃだめ……っ♡♡♡）

だめだと分かっているのに、腰が勝手にくい♡くい♡と鉤谷の顔に押し付けられていく。

革紐で縛られた手首がきしむ。逃げられない。逃げたいのかさえ、もう分からない。

指が一本、カントに挿入された。

ぬちゅっ♡♡

タコだらけの関節が膣壁を擦る。滑らかじゃない。ゴツゴツした異物感が、中の柔らかい肉をごりっ♡と押した。

「う……おっ♡♡ 太い……っ♡♡ 指……硬い……っ♡♡♡」

「縫い針のタコだ。——気に入ったか？」

「気に入るわけ——おおおっ♡♡♡」

二本目がねじ込まれた。指が中でV字に開いて膣壁を押し広げる。

ぐちゅ♡ぐちゅ♡

水音が弾ける。

「きつい。上等の革と同じだ。最初は硬い——だが使い込めば馴染む」

「つか……い込む……って♡♡♡」

三本目。

カントが三本分に押し広げられた。愛液がだらだらと指を伝い、鉤谷の手首を濡らし、仕立て台の革にぼた♡ぼた♡と垂れる。

指がぐりん♡♡と回転して奥を搔き回す。ザリザリした指先が膣壁の敏感な部分を擦り当てた瞬間、視界が白く弾けた。

「ひあっ♡♡♡ そこっ♡♡♡ そこだめっ♡♡♡ なんか……来るっ♡♡ お腹の奥からっ♡♡ 来てるっ♡♡♡♡」

鉤谷が指をぐるぐる回しながら引き抜いた。

ひくひく♡ひくひく♡

カントが、引き抜かれた指を追いかけるように口を開閉する。

「……仕立て前の革は、まず柔らかくする。お前もだ」

鉤谷の手がベルトにかかった。

金属のバックルが外れる音。ジーンズのボタンが弾ける音。

目の前に——突き出された。

太い。血管が浮き出て、蛇のようにうねっている。カリが大きく張り出して、先端から透明な汁がとろ♡と糸を引いていた。

「……っ♡♡」

（おちんちん……っ♡♡　こんなに……大きい……っ♡♡　こ
んなの……入る……わけ……っ♡♡♡）

「革を鋳型に合わせるのと同じだ。最初だけきつい——すぐ
に俺の形に馴染む」

「待って……っ♡♡　待ってください……っ♡♡　ぼく……
初めてで……っ♡♡♡」

「知ってる」

「知ってて——っ♡♡」

「知ってるから、やるんだ」

先端がカントに押し当てられた。熱い。指よりずっと熱い
肉の塊が、入り口をぐい♡と押し広げる。

ずぶっ♡♡♡

「おおあっ♡♡♡♡　む、むり……っ♡♡♡　大きすぎ……っ
♡♡♡　入らないっ♡♡♡♡」

裂かれる。身体が真ん中から裂かれる。

処女膜を突き破る鈍い痛みと、それを覆い尽くすほどの圧
迫感。カントが限界まで押し広げられて、内壁が鉤谷の肉棒
の形にぎちぎち♡と押し潰された。

鉤谷は止まらなかった。

ずぶずぶずぶ♡♡♡